

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 辻 裕史
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.36 No.4
2012.7.1
会報 (通巻 214 号)

日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
(禁転載)



目次

CONPT – TOUR2012の足跡	3
朝日新聞社 製作本部主査 竹内 省吾	4
信濃毎日新聞社 印刷局次長 宮澤 秀紀	4
中日新聞北陸本社 技術局局次長兼制作部長 倉橋 誠	5
日本経済新聞社 製作局技術部次長 加藤 謙一	6
日本経済新聞社 情報技術本部 田村 翔	7
(株)日経東京製作センター 東雲工場次長兼保全技術部長 橋本金四郎	8
光村印刷(株) 新聞印刷事業部川越新聞工場工場長 柳沢 一則	9
読売新聞社 前制作局次長(東京メディア制作(株)・代表取締役社長) 西 智之	10
(株)KKS 取締役システム制御部長 池田 洋	10
サカタインクス(株) 新聞・オフセット営業技術部マネージャー 坂本 浩章	11
第一工業(株) 搬送システム本店営業部主任 中島 悠希	12
DICグラフィックス(株) 新聞インキ事業部東京新聞第一営業部 担当課長 川上 幸則	12
(株)東京機械製作所 営業本部営業部部長 都並 清史	13
東洋インキ(株) 新聞販売統括部統括部長 上井 正人	14
ニチロ工業(株) 取締役副社長 下島 敏章	15
ニチロ工業(株) NS事業部営業第二部関東営業課主事補 岸本 仁	16
パナソニックSSインフラシステム(株) メディア営業チーム 伊藤 宏	17
富士フイルムグラフィックシステムズ(株) 執行役員新聞事業部事業部長 辻 裕史	17
富士フイルムグラフィックシステムズ(株) 新聞営業部販売一課主任 千葉 実	18
富士薬品工業(株) 営業三部部長 新井 信夫	19
三菱重工印刷紙工機械(株) 営業本部東京支社新聞輪転機営業部長 矢森 仁	19
写真に見るツアー点描	21
新局長に就任して	
京都新聞社 印刷局長 山口 雄二	22
下野新聞社 制作技術局長 坂本 裕一	23
日本経済新聞大阪本社 製作本部長 佐々木利晃	24
日本ボールドウィン(株) 第二事業本部マネージャー 長谷川淳司	25
(株)金陽社、東洋インキ(株)	26
東芝ソリューション(株)、清水製作(株)	27
椿本興業(株) 執行役員装置担当 藤重 卓一	28
新入会のことば	28
JANPS準備部会報告	29
第38回定時総会開く	29
会員消息他	29

- 表紙写真提供：CONPT TOUR 2012入選作より
- 読売新聞社 西 智之氏「デュッセルドルフ市内」
- 表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター
- 組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

CONPT TOUR2012の足跡

drupa2012展視察を主目的にドイツ、フランスの新聞社・印刷工場を巡ったCONPT-TOUR2012が無事終了しました。ツアーは総勢37名(新聞関係15社16名、会員社13社15名に会友1名、現地参加2名に事務局1名、添乗員2名)と、久しぶりの大型視察団となりました。

一行は9日間の日程で5月9日(水)フランクフルトに向け成田を出発、17日(木)に全員無事帰国。前半はフランクフルター・アルゲマイネ(FAZ)社の本社・工場、ダルムシュタットにあるIFRA本部を訪問、両所で素晴らしいランチをご馳走になるなど歓迎を受けました。FAZ社では経営戦略に加え、高級紙としてのブランド力をもとにデジタル部門へ積極展開する現状を詳しく聞き、ドイツ最大規模の同社印刷工場を見学。日本の方式との違いや環境に配慮した現場を見聞しました。

IFRA本部では特別セミナーを開講してくれ、世界の新聞界の情勢からカラー技術の細部にわたる講義まで、ワーフルさんをはじめお馴染みのメンバーがレクチャーしました。「drupaは新聞製作技術に特化したエキスポではないので、10月のIFRA展を見なければ新聞の将来は見えない」とワーフルさん(CEO代理)。

＊

drupa展視察は2日間の予定をとり、19ホールに及ぶ広大な会場を巡回しました。今回のdrupaは活気を欠くというのが常連の声で、出展は1850社と前回より120社減少、入場者も前回の39万人から2割ほど少ない31万人4500人(海外客は19万人)にとどまったようです。第1日目は全員で懇話会会員社と日本企業のブースを中心に見て回り、2日目は上流、下流、デジタル印刷機の3班に分かれ視察しました。デジタル印刷機時代は本格的な

幕開けを迎え、各社ブースは花盛りといった状況。話題はナノグラフィーのイスラエル・ランダ社で、開発途上とはいえブースには人が密集し見学者の興味の的といった感じ。

パリに移動し、フィガロ紙の本社を訪問しましたが、ファッションの別冊マガジンなどをテコに紙勢回復につなげようとする姿が目についたほか、同紙を刷る印刷別会社では、すべて委託なしに1工場内で完成させる経営コンセプトが興味を引きました。

＊

最終日、パリのホテルで成果を聞く研修会を開き、林克美さん(インテック)、加藤謙一さん(日経)、黒沢勇さん(共同)の講師陣には、深夜まで資料作成をするなどご苦勞をかけました。恒例の「さよならパーティー」はすき焼きで打ち上げ。同窓会のネーミングを、ちょうどこの日就任したオランダ新大統領にちなんで、「オランダ会」とすることで衆議一決しました。旅行中、団長・辻裕史さん(FFGS)、矢森仁さん(三菱重工印刷紙工機械)、林さん(同上)には何かと気遣いをいただきました。コーディネーターとして途中駆けつけてくれた木村禮さん、部屋で“居酒屋”を開いてくれた千葉実さん(FFGS)にも改めてお礼を申し上げます。(事務局)

CONPT TOUR 2012視察日程

5月 9日(水)	東京(成田)発 フランクフルト着
5月10日(木)	フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング社・FSD社・メルフェルデン印刷センター
5月11日(金)	IFRAセミナー、国際新聞博物館
5月12日(土)	drupa展
5月13日(日)	drupa展
5月14日(月)	フィガロ紙、ランプリムリ印刷センター
5月15日(火)	研修会
5月16日(水)	パリ発
5月17日(木)	東京(成田)着

ミッドナイト・イン・パリ

朝日新聞社 製作本部主査

竹内 省吾

行きの飛行機でウディ・アレン監督の『ミッドナイト・イン・パリ』を見た。通りかかった車に乗って1920年代にタイムスリップ。フィッツジェラルドやピカソと遭遇する映画だ。冒頭のパリの街並みの映像は、まるで観光局の宣伝だ、と普段なら思っただろう。しかし、機上の私は魅せられた。オフはエッフェル塔から夜のパリを眺めよう。

宿泊先のホテルがあるベルサイユからパリ市内までは25キロほど。RER（地域急行）で40分かかる。さらに2時間並んで展望台にたどり着くと23時。だが、それに見合うすばらしい夜景を堪能した。下りも長蛇の列。終電が気になり階段で下りた。急げばいいのに、途中の景色がいちいち素敵だ。

駅に着くと日付が変わっていた。地下ホームで時刻表を見てみると、おしゃれな制服の女性駅員がやってきた。「ベルサイユ・ゴッシュ」と私。「ノー・トレイン」と駅員。でも「10分後に白いバスが来る」と教えてくれた。地上に戻りしばらくすると、行き先は読めないが白いバスがやって来た。バックパッカーの血が騒ぎ、乗った。黒い肌の運転手に「ベルサイユ」と言うとうなずいた（気がした）。乗客は15人ほど。観光客らしい数人は早々に下車。その先は郊外の住宅街だ。停留所のアナウンスはない。エッフェル塔とセーヌ川の位置から、方角は間違っていないはずだ。見覚えがあるところで降りよう。50分くらい経った。距離的にはそろそろだ。運転手に話しかけたが通じない。「パリに戻れ」と言っている気もした。そばの老夫婦も心配顔。途方に暮れた。

そんな時、「スピーク・イングリッシュ?」。バスの中ほどにいた女性が話しかけてくれた。日本語のように脳に沁みた。「ベルサイユに住んでいるから一緒に行きましょう」と。

助かった。20分後、一緒に降りた。バスは残りの客を乗せて走り去った。RERとは別の駅だった。彼女と会わなかったらここで降りただろうか。あとは宮殿を目指せばいい。夜中の2時前だ。「もう大丈夫。メルシーマダム」と何度も言ったが、ついて来てくれる。心から感謝した。話しながら10分くらい歩くと、ホテルが見えてきた。一緒に来てくれた理由が分かった。

「これは私の車よ」。彼女はパリへ行く時は、ベルサイユで車を置いて電車やバスに乗り換える。その駐車場がプルマンホテルの前だったのだ。なんという偶然だろうか。彼女の青い車を見送った。ブレーキランプの5回点滅はなかったが。アレンの映画なら彼女はマリー・アントワネットだろうか。

前置きが長くなりました。日本においては紙新聞が収入の中核をなす状況が当面は続くでしょう。ツアーでは新技術の隆盛に圧倒される一方で、紙新聞の生産体制を維持していく「備え」が必要だと痛感しました。これから参加者のみなさまと新聞を支えていきたいと思っています。

デジタル印刷機、頼みます

信濃毎日新聞社 印刷局次長

宮澤 秀紀

「なんであなたが私より先にパリに行くのよ」と泣いた妻を残して旅立ち、携帯メールで品番指定が届いたシャネルの口紅を無事買って、任務完了しました。

一だけで終わっては困ります、私自身も。

新聞が「まだ大丈夫」でよしとせず、反転攻勢する道はあるはず。ドイツ、フランスの有力紙や世界屈指という印刷展示会でヒントを見つけない—と考えていました。

でも報告をまとめながら、もやもやは晴れません。取材が足りなかった。何か大事なところを見落とした気もして。

フランクフルター・アルゲマイネ紙では、民主主義を育むという理念から始まり、求人サイトや投資コンサルまで手を広げるという説明。堂々と話すので、「創刊の志から離れていく悩みはないのか」と意地悪な質問を。

答えは「よく分かっている。だが、独立性が重要。そのために利益を出さなければいけない」。また堂々としていて、ちょっと感心しました。

フィガロ紙では、部数が下げ止まったと言うので、「何をしたらからか」と聞いたら、「フルカラー化などの紙面刷新をした」。

それだけ？ 何か他にあるでしょうに。

メインのドルッパは、本当に広くて疲れましたね。2日目は、デジタル印刷機を見て回る「チームD」に飛び込み参加させてもらい、正解でした。

各社自慢の最先端スペックを集めると、そう遠くなく、新聞印刷に使えるデジタル機ができそう。そんな期待がみえました。

コンプトのメーカーの皆さん。この際、結集して「日の丸」デジタル印刷機を造ってくれませんか？ 得意の技術を持ち寄って。

新聞社の皆さん、デジタル印刷に合う新聞の形を一緒に作りませんか？ ベルリナー判くらいに小さくしましょう。

役員の方々ははじめ、皆さんには本当にお世話になりました。

お付き合いは、これからが楽しみです。せっかくの業界横断の仲間ができたので、何かできるといいですね。

おまけのフリータイムは、まったく準備していかなかったんです。着いてみたら、厚いガイド本が付箋でいっぱいの人、寸暇を惜しんで街に出る人…。

私は行き当たりばったりでした。でも楽しかった。

撮ってもらったスナップが、あまりに幸せそうな顔で写っていて、妻にも会社にも見せられません。

目で見たまものの印象は強い

中日新聞北陸本社 技術局局長兼制作部長
倉橋 誠

中身の濃いCONPT-TOUR2012でした。視察、見学、移動に夜は飲んでと日程はびっしり。あっという間の9日間でした。

私自身は、主に記事関係や組版システムに携わってきて、新聞印刷は素人同然。インクジェット方式の輪転機がこれからの目玉とは耳にしていたものの、ツアー参加が決まり、あわててデジタル印刷機とは、とにわか勉強。その上、出発前に新聞協会から上流関係レポートを頼まれ、安請け合い。こりゃ困ったと不安を抱えたまま一路欧州へ。

機中12時間。疲れましたがドアが開くとフランクフルト。「どこでもドア」のよう。夏時間のドイツでは、陽が沈むのは21時半頃。ついつい周囲を散策してしまう。緑の多い町並みはマロニエの花盛り。遠くで教会の鐘が響き、異国と実感する。

* * *

新聞社の訪問はドイツのフランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング社と、フランス、パリのフィガロ社。両社とも高級紙としての信用力、ブランド力を背景にしたデジタル戦略を話してくれた。説明役の方のプレゼン振りがかっこよく、説得力を感じてしまった。私のコンプレックスかもしれない。

フランクフルター・アルゲマイネ社ではプレゼン後、メディア部門の女性責任者に意を決して、質問した。たいした内容でもないのに、案の定日本語→英語の変換はうまく行かず、しどろもどろ。なんとか通じたよう(?)だが、どっと疲れた。

さてDRUPA会場はとても広大でした。一日目は全員で会場をほぼ一巡り。昼食以外ほとんど休憩もせず見て回り、足が棒になってしまった。実機展示や実演も多く、キョロキョロ。人も多く、迷子にならないよう付いて

いくのに精一杯。これがかのインクジェット印刷機かと印刷見本を手にして一息。

二日目は上流系視察チームで探索に。タブレットをペンでタッチしながらサクサク動かして説明してくれる。動きにはホレボレするが中身はよくわからない。途中見かけた3D印刷、LANDAのデジタル印刷機の操作パネルなど目で見たものの印象は強い。英語が理解できればと思いつつ、日本人がいるブースでほっとした。

ツアー最後の現地研修会では林さん、加藤さん、黒澤さんから発表があった。この忙しい日程の中、レポートをまとめるとはまさに超人的。パリへの列車の隣席でPCを叩いている加藤さんを見ているだけに頭が下がります。お三方ともありがとうございました。

* * *

とにかくテンション高めで乗り切った充実したツアーでした。顔合わせのときからうち解けた雰囲気「オランダ会」のみなさん。ライン河畔、パリの街角では矢森さんの発声の下、三三七拍子でさらに結束を固めました。これからよろしくお付き合いをお願いいたします。

駆け足のCONPT-TOUR

日本経済新聞社 製作局技術部次長
加藤 謙一

初めての海外出張、それもCONPT-TOURで今年は4年に一度のdrupaが開催。すべての条件が整った出張で申し分なし。行先はdrupa開催国であるドイツとフランス。視察先は両国の新聞社と印刷工場、WAN-IFRA本部でのIFRAセミナー、アーヘンでは国際新聞博物館見学、drupaと盛り沢山。出発前から期待と不安の日々を送る。

日本を午前中に出発し、約12時間のフライトでフランクフルトには夕方到着、全員ホテルで夕食を済ませ、外にお散歩。午後8時を

過ぎているのに太陽が沈む気配が全くない。近くのカソリンスタンドに併設されているコンビニ風のお店で大好物のヴァイスビア(シェッファーフォファー：お勧めです)を調達、飲んで一気に寝ようとしたものの何故か一向に眠れない。逆に目が冁えてしまい何度も寝ては目が覚めることとなった。ただ、翌日は朝6時から始まる朝食会場に乗り込む、一番乗りと思ったが数名のツアー仲間は既にお食事中。チーズ、ソーセージ、パンとどれをとっても美味しいものばかりでドイツにやってきたと実感。朝食後は第一工業の中島さんと後輩の田村君と朝のフランクフルト市内を散策、3人でいざ、フランクフルト中央駅に向かった。Uバーンのチケットはよくわからないまま一番安いものを購入、改札はなく行き先だけ確認し乗車。車内はとても静かで辺りを見渡すと分厚い本を読む人、音楽を聴く人、iPadを操作している人、あっ、新聞を読む人がいてほっとした。異国での準備体操を済ませホテルに戻ると、いよいよ視察がスタート、ここからは時間が倍速、4倍速で経過。

視察先の新聞社はフランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング社とフィガロ社、両社のデジタル戦略について説明を受けた。両社とも収入源の柱であった新聞紙面の案内広告が大きく落ち込み、新たな収入源としてブランドを前面に活用したビジネスモデルを展開、試行していることを紹介してもらった。しかしながら、すべてがデジタルに移行するのではなく紙の新聞への可能性をもっていることに驚きと喜びを感じた。印刷工場はフランクフルター・ソシエテーツードルックライのメルフェルデン印刷センターとランプリムリ印刷センターの2社を視察。両社とも自社の新聞印刷だけでなく数多くの受託紙印刷を行っており稼働率の高い工場であった。また、紙面品質へのこだわりと環境保護へも積極的に取り組んでおり、環境先進国の一端を見た。

drupa2012の視察は2日間しかなく、駆け足で各ブースを回った。前回よりも来場者が少ないと言われていたが会場の規模には圧倒させられた。お目当てのデジタル印刷機もいくつか見ることができたが残念ながら全てを制覇することはできなかった。個人的には1週間くらいかけてじっくりと見たかった。全体の印象は老舗のオフセット印刷機メーカーがデジタルなしに生き残れない時代となり、何らかの形でデジタル印刷機を出展、またデジタル印刷機メーカーは勢いを増し、オフセット印刷の領域を侵す存在となってきた。新聞印刷においては品質やスピード面ではまだまだオフセット優位だが何らかの形でデジタル印刷機を活用したビジネスモデルの確立が必要であると感じた。



今の時期しか食べられないシュパーゲル

ツアー期間中の食事も充実していた。ドイツではこの時期しか食べることができない春の訪れを知らせるホワイトアスパラガスのシュパーゲル、フランスではクロワッサンとエスカルゴを頂くことができた。もちろん、ビールとワインも。

このように視察はとても充実したものになり、多くのことを見聞させて頂いた。ただ、何よりも今回のツアーで皆様と出会え、過ごせたことが大きな財産になりました。オランダ会の皆様、大変お世話になりました。

不安一杯のツアー、無事完走

日本経済新聞社 情報技術本部

田村 翔

社内の誰からも羨ましがられた今回のツアー参加ですが、個人的には不安要素で一杯でした。初の海外出張(海外自体が2回目)、下流工程寄りのツアー内容、バス移動に弱い体質、何より参加者名簿にズラリと並ぶ立派な肩書にすっかり気後れしていたのです(おまけに女性参加者ゼロ!)。さらに事前説明会後の飲み会で目の当たりにした「酒好きオジサン軍団」の実像と、副団長・矢森様の壮絶な「儀式」にも圧倒され……かくして私のCONPT-TOURは幕を開けました。

とはいえ飛行機に乗ってしまえば不安も期待に変わるもの。他社の皆様とも気軽に話せるようになったのは、誰もが多少なりとも緊張していたからでしょうか。9日間のツアーは実際相当なタイトスケジュールでしたが、30名超の集団から病人・怪我人・行方不明者が1人も出ることなく乗り切れこと自体、とても印象深いものとなっています。

ツアーのメイン、DRUPA展は事前情報に違わぬスケールの大きさ。しかし意外に空いているぞ…?と思ったのもそのはず、来場者が前回より2割近く減少したとか。現地にいた私達にとっては比較的歩きやすくて不幸中の幸いでした。展示の詳細は割愛しますが、上流系業務に携わる私にも、商業印刷・デジタル印刷の勢いを感じさせる展示会でした。

個人的にはDRUPAよりも期待をしていた新聞社2社の



ベルサイユ宮殿の庭園にて

訪問ですが、どちらもかなり駆け足で終わってしまいました。デジタルサービスの展望もですが技術面の詳しい話を聞きたかったなと、少し残念に思っています。

印刷工場見学において印象的だったのは、工場内での広告の折り込みや郵便配送のためのインクジェット宛名印字など後工程における日本との相違点のほか、ツアーメンバーからよく聞かれた「日本ではあり得ないよね」というコメント。その言葉を聞いて、まだはつきりした形にはなっていないけれども何かの「気付き」を皆様が得ていたのでは、と私にはそのように感じられました(生意気?)。

見学以外のオフタイムでも本当に色々な思い出を作ることができましたが、中でも特別なのはパリでの早朝ランニング。ランニングが日課という副団長・矢森様と、トライアスリートの東日印刷・影山様と一緒にベルサイユ宮殿横のサイクリングロードをゆったりRUN。その復路で見晴らしの良い道を発見し中に入ると、出たのがベルサイユ宮殿の庭園のど真ん中！ひと気のない庭園の、手入れされた植木と泉の美しさをたった3人で独占した贅沢な時間でした。後々考えると、開園時間前に作業員用の扉から不正侵入したような気もしますが…近くにいた掃除のおじさんも快く記念撮影に応じてくれました。

帰国後も入社5年目にして「贅沢な出張に行って」と周囲からいじられ続けている私ですが、この経験とご縁を繋げていきたいと思えます。「オランド会」の皆様及びCONPT事務局にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

思いつくままに

(株)日経東京製作センター
東雲工場次長兼保全技術部長

橋本 金四郎

今回、ドイツとフランスを訪れてきた。短い期間の中で、二国の国民性の違いが何とな



く判ったような気がした。ドイツ人は、几帳面で質素な食事(ビールとソーセージ、ジャガイモ——でもフランクフルトのアスパラは美味しかった)。フランス人は、利己的でプライドが高い。

それは、喫煙マナーにもよく現れていたと思う。ドイツは日本と同じように、一定のルールの下にあり、逆にパリ市内などでは歩行喫煙は、まだ当たり前であった。

話しは変わるが、ヨーロッパのツアーに欠かせないものに、ミキ・ツーリストとなるものが在ることを知った。日本では、JTBなどは世界的にも大きな旅行会社だと思っていた。しかし、海外ではミキなるものがより知られているらしい。

そのミキ・ツーリストが、各観光地にツアーコンダクターやガイドを派遣してくる。そのガイドが現地日本人妻や日本語の堪能な人たちである。その現地妻が、世界中に散在していて活躍しているようだ。改めて、日本人女性の逞しさに感心させられた思いである。

今回、新聞社や工場を見学して思った事として、ヨーロッパもやはり日本と同じように、紙媒体の縮小で電子媒体の拡大による収益の向上を目指している点である。しかし、日本と同様に試行錯誤の状態、これといった決め手には欠けるようである。

また、ヨーロッパ内陸部には地震は無いと聞くが、去年の東日本大地震を経験した私としては、巻取紙を野積み状態で管理している工場の光景(写真)は異様に感じた。

やはり大陸から追われた日本人は、地震や津波など一番恵まれない土地で生きていく事を選んだ民族なのだろうか。それとも農耕民族として肥沃な土地を選んできたのだろうか。また一つ、僕の学ぶべき課題が増えたような旅でもあった。

最後に、ツアーで御一緒された皆様とJTBコンダクター、現地ガイドさんに感謝と今後の活躍を祈願して--再見(ツァイチエン)。

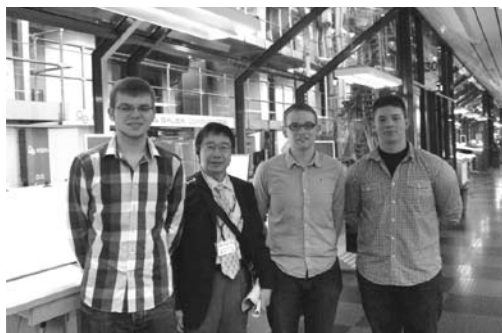
井の中の蛙大海を知る

光村印刷(株) 新聞印刷事業部川越新聞工場
工場長

柳沢 一則

【初めに】前日の深夜まで妻と喧嘩しながら荷物詰め。翌日、ぴかぴかのパスポートを胸に、いざヨーロッパへ。フランクフルト空港で係官の言語明瞭、意味不明の質問にたじろぎながらも無事入国、初めて海外の土を踏んだ。ドイツの夜は10時頃まで明るい。仕事を考えず酒を飲みながら、のんびりと黄昏時を過ごしたのは何年ぶりだったろうか。

【視察】ドイツとフランスの新聞社2社、印刷工場2社を視察。新聞社はネットに押され、広告収入の下落が課題となっていた。紙媒体の苦境は洋の東西を問わず、と改めてネットの脅威を感じた。F・A・Z社の「品質重視(記事内容)、利益追求ではなく情報を市民に与え、チェック機能を働かすのが使命」と強調



メルフェルデン印刷センターの新入社員と

していたのが印象的であった。

印刷会社は「印刷物を第三者に委託することなく、すべて工場内で仕上げてお客様に提供する」をコンセプトにチラシ、雑誌を新聞に折込むインサーター設備を有していた。新聞の付加価値を高めるための手段である。

Drupa2012は予想通り、数多くのデジタル関連機器が展示されていた。デジタル印刷は成熟化、画一化が一段と進んでいるようだ。

今後、各メーカーがどのような手段を講じて他社との差別化を図っていくのだろうか、興味深い。新聞印刷のデジタル化は実用段階に至っていないのか、新しい情報がなかった。

【フリータイム】純和風党で味覚音痴の私だが、フランクフルトのメイン河畔で食べたホワイトアスパラはおいしかった。ビール、ワインも私の胃液にぴったり合った。

ケルン大聖堂は大きすぎてカメラに収まらない、収めようとすると人物が小さくなる。700年の歴史を持つ大聖堂と人生100年に満たない人間を同等の大きさで収めようと思うのが大間違いだった。

ベルサイユ宮殿の贅を尽くした造りと広大な庭園は田舎育ちの私には違和感を覚えるほど。しかし、ルーブル美術館の歴史を語る夥しいコレクションには感動。本物が写真では判らない陰影、立体感を持って眼前に迫ってくる。駆け足の見学であったが、歴史好きの私には至福のひと時でした。

「人を見たら泥棒と思え」と言われたパリは好きになれないが、ルーブル美術館だけは、もう一度、時間をかけてじっくりと鑑賞したい。胃液が「納豆、味噌汁が欲しい」とわめきはじめて最終日にフランス料理の定番、エスカルゴを堪能。井の中の蛙が、やっと大海に慣れて来た頃に帰国となりました。

【最後に】ツアーでは大変、お世話になりました。海外経験の豊富な方がたくさんおられ、安心して旅を続けることが出来ました。改めて感謝申し上げます。帰ってきてからも

スカイツリーの開場、金環日食とイベントが続き、忘れられない2012年5月となりました。

情報というボール

読売新聞東京本社 前制作局次長

西 智之

ユーロ相場が気になる。欧州金融市場を分析する素養はなく、たんに「出発前は1€＝108円だったのに——」とユーロ安を憂っているだけだ。コンプトツアーから戻って1か月以上経つが、今なお残る「後遺症」だ。

ツアーのメインは「drupa」だったが、盛りだくさんの日程をこなした。特に、新聞社2社(ドイツ「FAZ紙」とフランス「フィガロ紙」)の本社とそれぞれの委託印刷工場を効率よく視察できたことに感謝したい。事務局のスケジュール調整能力は高い。

世界中の新聞社が直面しているデジタル戦略。その進捗状況を探ったが、2社とも明快な解を見出していない。当事者からの一次情報だけでは鵜呑みに出来ないが、FAZ紙は、「われわれは、行きたいところに行っていない」という表現で「道半ば」の現状を嘆いてみせた。フィガロ紙は軸足をデジタルに移した感があったが、FAZ紙は「紙が培ってきたブランド力」を牽引車として「紙・デジタル・ビジネス」をパッケージとして売り出すスキームを披露した。ビジネスとして例示したのは「人材不足が指摘されている若者向けのビジネススクール」「上層階級をターゲットにしたフォーラム開催」、また金融市場にも手を広げる構想も。収益につなげる仕組みは薄弱だったが、魅力的なコンテンツを模索する同業社の姿勢は大いに刺激になった。

「drupa」では多くの出展企業ブースを見て回り、「WAN-IFRA本部」ではセミナーにも参加した。一連の視察を終えて、いま気がかりなのは「ビジネスモデルのヒントがころがっていたのに、感度が悪くて気づけなかつ



デュッセルドルフ市内はdrupa一色

たのではないか」——ということだ。例えて言うなら、次から次へと飛んでくるボール。高めもあれば低めのクセ玉もある。ど真ん中の直球だったのに見送ってしまったことはなかっただろうか——。これから一つひとつの配球を思い出して、スコアをつける作業をしていこうと思っている。

ともかく、知識欲旺盛で優秀なメンバーと行動をともに出来たのは、誇れる財産となった。5月15日のフランス大統領就任式典にちょうどパリに滞在していた縁で、今回のツアー同窓会を「オランド会」(晴れ男の辻団長、気合いの矢森副団長の共同提案だと思われるが)と名づけたとか。オランド新大統領に何の思い入れもないが、ただただ長期政権になることを願っている。

<6月20日付で東京メディア制作株式会社代表取締役社長に就任しました>

欧州うなぎ

(株) KKS 取締役システム制御部長

池田 洋

私にとって、初めての海外視察CONPTツアー7泊9日の旅は、「欧州新聞製作事情視察団」と大変に仰々しい名前でした。

これは視察先新聞社とdrupa2012の見学で欧州の新聞製作事情を調査する事の様です。

ということで、フランクフルト(アルゲマイン社)とパリ(フィガロ社)で訪れた視察先

新聞社のセミナーでは、発行部数と広告収入の減少分を、アルゲマイネ社ではそのブランド名と信用を利用した教育ビジネス、リクルートなどの新しいビジネスソリューションを展開、フィガロ社では情報を収集するメディアが新聞からインターネットへ移行している現状からデジタル配信に力を入れている様子が伺えました。また両社の印刷工場では、ディスクとインサータを使用して折り込みを入れ、新聞を郵送で発送している実情を知り、朝刊が朝読める日本の宅配システムの素晴らしさを再認識して来ました。

ところで、我々日本人は一週間も海外にいと日本食が大変恋しくなります。ここからは、番外です。私は大の和食党、日本を出発する前にパリに有る某老舗鰻屋の直営店をチェック、最終日前日に訪れ、そこの鰻重を食してきました。次回はぜひ皆様も訪問してみてください。

場所はルーブル美術館の傍、サントノール通りに面しています。スマートフォンのマップ機能で現在地から店迄のルートを検索、見知らぬパリの町並みを、この「文明の利器」は間違いなく最短で案内してくれました。

鰻の寝床の様な店内に入ると、日本人は二人だけ、フランス人が10数人、器用な箸さばきで鰻重を美味しそうに食しています。

早速、鰻重と菊正宗の熱燗をオーダーしました。突き出しの漬物と日本では考えられない「大根おろし」を当てに一杯飲んでいると、待望の鰻重が運ばれて来ました。蓋を開けると見事な大きさの鰻の蒲焼が飯の上に鎮座、一週間ぶりの和食と感激の対面をしました。

女将に聞くとオランダ産の天然鰻との事。



期待して箸を付けると、身は柔らかく見事に油の落ちた鰻、私にとって物足りない代物でし

たが、フランス人はこの味を求めてリピートするらしい。去年ドイツ土産に貰ったスモークドイール(鰻の燻製)の油の強さを思い出し、あの油は何処へ行ってしまったのかと思いながら「郷に入れば郷に従へ」と久しぶりの和食を美味しく堪能して来ました。

日本では、鰻の稚魚が捕れず、値段の高騰が報道されています。近い将来、オランダ産天然鰻に日本でも会えるかも知れません。

その時は、適度に油を残した柔らかい日本人好みの鰻にきっと変身することでしょう。

最後に、御同行の皆さまに大変お世話になり、有難うございました。今後共、よろしくお願いいたします。

念願のドイツ再訪がかなう

サカタインクス(株)

新聞・オフセット営業技術部マネージャー

坂本 浩章

CONPT-TOUR2012に参加することが決まり今回の渡航先はドイツ・フランス。ドイツは6年前、フランスは10年前に一度訪れた国で、特にドイツ旅行は楽しかった記憶がよみがえる。今回は、世界最大の印刷機材展であるDRUPAの視察もあり、再度訪れたいとは思っていた。不安と期待を持ちいざ出発。

ドイツの訪問都市は、フランクフルトとアーヘンで、どちらもホテルの近くを歩いてみたが、町並みはきれいで、車は日本で見る高級車ばかりと飽きることがない。食事もパンにチーズ、ビールにワイン、これまたおいしい。一方、DRUPA展視察は、会場が広くスケジュールもかなりタイトで最後の訪問先で椅子に着席したときはほっとした。翌日自由視察だが全てみることはできず、規模の大きさに驚きドイツの視察は終了。翌日はパリだ。パリは花の都だそうだが、駅周辺は落書きに怖そうな人たちとこれがパリ？ドイツとは随分雰囲気が違う。何事もなかったが、しいて

例えば、地下鉄で逆方向に乗車してしまい、急いで乗り換え集合時間に間一髪のセーフ。一緒に行動させて頂いた方には感謝しきれません。また、夜のLIDOでは眠気に勝てず、ショーではナフキンを頭にかぶせられ、何かといじられ一生の思い出に・・・。

いろいろありましたが、非常に楽しいツアーでした。特に新聞社や他の業者の方々と一緒に参加する研修会はすばらしいと感じました。

忘れられないオランダ

第一工業(株) 搬送システム本店営業部主任
中島 悠希

歴史的なユーロ安の中、大統領交代ということまた歴史的な瞬間にフランスへ。オランダ会と名前がついて、今後絶対忘れられない外国首脳No. 1となった。

初日は移動のみだったが、12時間のフライトと夕飯のデザートに出たフルーツソースの濃厚さ、夜9時になっても明るい環境に体が順応せず、ほとんど眠れないままのスタートとなった。それでも朝食は毎日ほぼ一番乗りでおいしいパンを頂き、その後のホテル周辺散策が大変有意義な時間となった。

drupaでは規模の大きさに驚いたが、それでも入場者数が前回より20%減との事で、世界的に見ても情勢が厳しいものなのだと痛感した。新聞社訪問では紙媒体以外の様々なビジネスモデルの話など興味深かった。

なかなかのハードスケジュールで限られた時間ではあったが、乗車時間ギリギリだったライン川下りに壮大だった。歩きながら写真を撮った壮大なケルン大聖堂、電車の時間に間に合わないと思わずに食後すぐに走って駅まで行ったが数十分の遅延…とヨーロッパらしさを満喫できた。移動中のバスでの衝突事故や、ドイツからフランス・パリへ入った時に感じたいかにも治安が悪そうな雰囲気、そして被害



はなかったがドイツでは電車内で実際にスリに遭遇するなど、怖さも思い知らされた。

凱旋門は上れると聞いたので、行ってみたらひたすららせん階段を上ることに。息を切らしながら頂上に着くと、東京のように高層ビルが密集していないパリ市内の景色はとても美しく、気持ちのいいものであった。

ルーブル美術館は騒がしかった。静かに絵画鑑賞といった雰囲気はなく、特に御目当てのモナリザの前は大混雑(写真)。予想以上に小さかったモナリザはロープが張られ近くに寄れない状態。鑑賞はそっちのけに皆に負けじと必死に写真を撮った。

他にも、目的を忘れかけながらひたすら歩いたフランクフルトの夜、勝負弱さを思い知ったアーヘンの夜、そして色々な意味で美しかったパリの夜と(もちろん夜以外もありますが)、団長そして副団長を始め皆様と大変有意義で貴重な体験を共有できたことに感謝申し上げます。この縁を今後とも大事にさせていただきます。

驚きと発見の初欧州

DIC グラフィックス(株)
新聞インキ事業部東京新聞第1営業部
担当課長

川上 幸則

3月某日上司よりちょっと話が…と言われ何か嫌な予感を抱きつつ、会議室に入り上司

から、実は…（微妙な間合い）

CONPT-TOURに行って来て下さいと言われなんと無く安心？いや大変なことを仰せつかり、背中にじっとりと汗をかいていました。訪問先は、ドイツ・フランスと聞き、私にとっては初めての欧州である。

慌ただしく日々は過ぎ、事前説明会で今回同行する皆様とお会いして、結束力の良さに今回の視察で新たな発見に期待をもちました。

出発当日は成田から空路12時間ようやくフランクフルト国際空港に到着、ホテルにチェックインして早速夕食会でシュニッツェル（子牛のカツレツ）を食し、待望のドイツビールを飲干し、明日からの強行日程と長旅の疲れを癒すためホテル周辺を散策致しましたが、夜9時を過ぎても日が沈まずに明るいのは驚きました。

翌日からは、ドイツ フランクフルターアルゲマイネ ツァイトゥング社・印刷工場視察。日本の新聞社と違い、編集部門はオープンフロアーにデスクという光景ではなく、記者それぞれに素晴らしい個室が与えられていたのには正直羨ましい思いと文化と価値観の違いを感じました。IFRA本部では、映画のワンシーンのような美しい芝生の上でのガーデンランチを経験。そして、広大なメッセ・デュッセルドルフでのdrupaを2日間足早に歩いて視察、足腰が悲鳴をあげ筋肉痛になりました。会場ではインクジェット印刷がやはり主流で、高品質化、高生産化、後加工化など技術進歩を視察、更に高付加価値印刷の進歩には驚愕しました。

筋肉痛の重い足取りで重いスーツケースを持って、フランスパリへ電車で移動、フランス フィガロ社・印刷工場を視察、印刷工場は環境負荷低減を考慮して水なしカラーキーレスを採用しているという事で、興味があったのですが実印刷を見ることができなく残念でした。

今回視察をして欧州新聞事情も日本同様発行部数減の中、新聞製作コスト削減、次世代事業展開に紙媒体とデジタル媒体を融合してクロスメディア化への模索を行い、新たな事業展開を図っていた。今後も欧米新聞社の動向も注目していきたいと思います。

最後になりますが、今回ツアーで非常に充実した視察を行えたのも、CONPT事務局をはじめ、関係者皆様の入念なる準備があったからこそだと思います。この場をお借り致しまして感謝申し上げます。また、ご同行させて頂きました皆様と貴重な経験と素晴らしい思い出もでき感謝しております。

これから末永くご指導の程お願い申し上げます。

嗚呼！すばらしき新聞愛

(株)東京機械製作所 営業本部営業部部長
都並 清史

去る5月9日、成田空港を定刻に飛び立ったNH209便のエコノミー席は、驚くことに「擬似リクライニング」でした。座面のみ前方にせり出すものの、背中部分はリクライニングしない為、行儀のよい姿勢を強いられます。後席に配慮した新型シートなのですが、旅の始まりから、「真面目に勉強せよ」という無言のプレッシャーを感じます。

フランクフルトまでの12時間、この辛さを和らげてくれたのは、地上よりも3倍酔うというアルコール、そして映画でした。日本人CAからワインを多めに奪取、小型スクリーンに集中します。まずは『アーティスト』、続けて『ヒューゴの不思議な発明』。ともにアカデミー賞の話題を独占した作品で、メガホンを取った監督たちの「映画愛」が裏のテーマです。無声映画のスター俳優や全盛期の伝説的監督など、自ら信じる道を一途に進む登場人物たちに感情移入するうち、うとうとしてきます。「3倍酔う」は本当でした。

生来の貧乏症です。旅の予習と準備は欠かしません。現地で？となるのが勿体ないので。重度の方向音痴で、自宅と会社以外では必ず入室した方向とは逆に歩きだしますが、なぜか海外は得意です。定番の「地球の歩き方」、パリ編とドイツ編を熟読。同書を携えたメンバーに「デュッセルドルフ市街地の地図は124ページ！」と空でコメント、苦笑されました。入念な下調べにより、緊張しながらもパリの地下鉄(乗り換え付)を堪能、街に出て欧州経済にも貢献して参りました。

旅の主たる目的であるDrupa視察、各新聞社、印刷工場見学については、他の方々も触れて下さるでしょう。ただ、真面目な見学も大切ですが、お客様とわれわれベンダーが、同じ視察地を訪れ、ともに見聞を広め、ともに飲み、ともに食し、ともに語らうことこそがCONPT-TOURの裏テーマだと思います。そういった意味で、Drupa視察後、サッカー観戦に沸くカフェで、「いま考えられる理想のデジタル印刷機」を、印刷スピード、価格、ヘッド、インキ、メンテナンス等のファクターから語り合ったのも良き思い出です。その時の「議事録」はご当地ビールのコースター裏面に書きとめ、今も大切に保存しています。

予習の割合が多かったパリではなく、実はドイツという国の美しさに魅了された旅もありました。フランクフルトでの第1日目、早起きしてホテルの周辺を散歩しましたが、とにかく空気が違います。聞けば政府が率先して国土に森を増やしているとか。その緑の美しさ。わが住環境を真剣に再考しています。

各視察先で膨大なメモを真摯に取り続けたKさん、デジタルの将来を議論した視察メンバー、逆に新聞コンテンツのアナログ的な在り方を語り合ったSさん。すばらしき『オランダ会』の仲間たちに、心より感謝と御礼を申し上げます。そして、この旅の真の裏テーマは、もちろん「新聞愛」なのでした。

傘をささずに過ごせました！！

東洋インキ(株) 新聞販売統括部統括部長

上井 正人

drupaの語源：ドイツ語のDruck（印刷）+ Papier（紙）の造語で、「印刷と紙の展示会」の意味との事。今年のCONPTツアーは、この4年に一度のdrupa視察を含めた7泊9日で催行され、私自身2回目の参加となりました。

リーマンショック直前に開催された前回から世界情勢が激変し、特に先進国の印刷事情が右肩下がり傾向の現在、何を主題とした展示会となっているのか興味深く視察してまいりました。

前評判通りIJ出力機と、その新技術の出展が多く、出版・商業印刷に加え、新聞の出力物も多数展示されていました。IJの導入市場として新聞もターゲットの一つになっている事を再確認致しました。今後、①スピード、②コスト、③品質、④バリエブル出力が本当に可能なのか、様々な課題をどう解決していくのか、事業として成立するのかに注目していこうと思いました(現状のままでは未だ厳しい)。

一方、視察先であるドイツのフランクフルター・アルゲマイネ紙が、「不動産と求人」の広告でITに負けた」というコメントが印象的でした。日本でもIT・電子新聞の発行が広がりつつありますが、2年前に「広告代理店機能を強化すべきだ」とIFRAセミナーで言っていた事を思い出しました。

夕方パリ街中のスタンドで、視察したフィガロ紙(水なし印刷)を1.5ユーロで買ったと



ドイツホテルの朝食テーブルに新聞の絵が！

き、スタンドのおじさんから「まいどおおきに」と言われズッコケそうになりました。朝刊でしたが、夕方でも多数置いてありました…（売れてないのか?）。

9日間のヨーロッパでは、旬のホワイトアスパラを中心に美味しい経験もさせて頂きました。既にサマータイムで、夜(?) 9時でも明るい事、アウトバーンから見た広大な田園とその向こうに火力発電所雲が立ち上っている風景は「異国の地だなあ」とつくづく思いふけてしまいました。また、激しい雨が何度か降りましたが、全てバスでの移動中で、一度も傘を差さずに済んだ事に感謝！ところが帰国後も時差ぼけ？がなかなか直らず大変でした。

参加メンバーは、今回も幅広く、色々な事を教えて頂きました。昼夜を通じて、非常に勉強になりました。drupa二日目には「謎のDチーム(デジタルチーム)」に参加させて頂き、充実した視察となりました。本当にありがとうございました。

郊外都市の豊かさに触れて

ニチロ工業（株）取締役副社長

下島 敏章

ドイツといえばビール、ソーセージ、そしてこの時期はホワイトアスパラ。初めてCONPT-TOURに参加するのに出発前から食い倒れの予感。

中国や東南アジアが海外旅行(出張)の定番だったのが、2年連続でのヨーロッパ(ドイツ)訪問。それも今年は単独行動ではなく、視察ツアーへの参加。その上ワガママ言わせて貰い、ドイツ部分だけで離団というスケジュールでの参加。説明会でメンバーの皆さんとお会いするまでは、どんな方が参加されるのだろうか？とドキドキでしたが、説明会後の懇親会はなごやかな雰囲気でした。

今まで梱包機械の仕事ばかりだったため、



印刷機器は包装展等で併催されている時に見るくらいしか縁がなく、印刷専門の展示会、それも世界最大のDrupe視察、初訪問のダルムシュタット、アーヘンの地は出発前から楽しみでした。

2日間滞在したフランクフルトは今まで通過のみだったため、新聞社、印刷会社視察の道中に街並みを眺めることができ、ヨーロッパ金融の中心地なのに落ち着いた雰囲気が印象的でした。空を見上げれば、抜けるような青空に飛行機雲が「井」の字を描いており、〇×つけて遊びたい衝動にかられたのは私だけではないかも。視察中、皆さんは印刷設備や製版工程に注目されましたが、私としては、やっぱり最終工程の梱包設備に目がいつてしまったのは梱包機屋の性。そしてお約束のホワイトアスパラの夕食でまだ2日目なのにミッションコンプリートした気分。

翌3日目はIFRA本部のあるダルムシュタット。早着したため、IFRA近所の教会のある公園へ。規模としては郊外の小都市という感じではありますが、生活と教会が密着しているのと、豊かで落ち着いた生活が送られているのだろうと容易に想像できます。その日の宿泊地アーヘンも同様の印象で、旧市街の中心部にはお約束のドームがあり、都市のサイズや構成要件が日本を含むアジアとはチョット違うと感じました。

そして、メインイベントのDrupe視察。

デュッセルドルフは3年に一度インターパック展で訪問しているため、ちょっと慣れた感じで会場を歩きましたが、展示物が全く違うので別世界に迷い込んだ感覚。巨大な展示

会場を2日間駆け足で一通り回り、日系企業の出展を見る度に、まだまだ日本も頑張っていると嬉しくなりました。そして一足先に帰国。楽しいメンバーと一緒に貴重な体験ができ、また参加したいと思いました。

初海外

ニチロ工業(株) NS 事業部
営業第二部関東営業課 主事補

岸本 仁

プライベートでは海外に行く予定は何度かありました。しかし、家族旅行の計画を立てると父親が入院したりと、その機会はことごとく消えてきました。今回こそはと思っておりましたが、他のメンバーの強運に助けられたのか、この呪いはね除け初めて海外に降り立つ事ができました。

今回のツアーが如何に有意義であったかは他の方々の原稿を読んで頂くとして、私は初海外の感動と戸惑い、意外に思った事などを述べたいと思います。

初めての海外は当たり前の事ですが異国情緒に溢れ、地元人にとっては何の変哲もないであろう通りでも、思わず写真に撮ってしまいました。その数なんと600枚以上。日本に帰ってから確認してビックリしてしまいました。また、それだけの枚数と撮ったにも関わらず9日間充電無しでも電池表示が僅か1本減っただけのデジカメにもビックリでした。

初めての海外が英語すら通じないドイツとフランス。不安に思い、音声付きドイツ語・フランス語対応の電子辞書を買って行きましたが、向こうの人は親切にも英語で話してくれる人が多くいました。ただ残念な事に、雰囲気英語だとは分かっても、殆ど聞き取れない私でした…。drupa会場を1人で回る機会もありましたが、ブースの人に話し掛けられても「ノーサンキュー。ジャパニーズオンリー」と合っているのか確信の持てない英語

を、カタカナで表記するに相応しい発音で返すのみでした。ただ、展示会ではメーカーの人間はあまり堂々と同業他社のブースは見られないものですが、放っておかれたお陰でゆっくりと見学する事ができました。

私の中の勝手なイメージではドイツはお堅い国というものでしたが、実際に接してみると、とても親切で、陽気な人達でした。フランスはパリしか行っていないんですが、大統領交代の日に出くわしたのが運の尽き。大渋滞は少々私のフランスへの印象を悪くしてしまいました。大統領就任のパレードがあるからといって、そのルート上の信号を取り外してしまうとは日本人の感覚からは信じられません。結局、信号を取り外す日、パレードの日、取り付ける日とパリに居た3日間はずっと渋滞していました。いつの日かプライベートでフランスの田舎にでも行き、この悪印象を拭きたいと思っています。



凱旋門からパリを見下ろす

旅(注:視察)の醍醐味と言えば食事です。ビールにワインと、大変美味しく頂きました。しかし、食べ物とは言えば…ANAの機内食が一番美味しかったかもしれません。別にJTBのプランにケチを付ける訳ではなく、地元では一流店ばかりをチョイスして頂いたにも関わらずこの程度なのかと、改めて日本の食のレベルの高さを認識しました。

色々あった初海外ですが、大変楽しく、元気に、有意義に過ごせたのはメンバーに恵まれたお陰です。ありがとうございました。

紙端がそろってない！

パナソニック SS インフラシステム(株)
メディア営業チーム

伊藤 宏

音楽や絵画などに興味が薄い私は、今回がヨーロッパ初体験。電源プラグとおつまみをを事前購入し、出発2日前に急いで荷造り、今回のCONPTツアーに滑り込み参加しました。

現地では、毎日真面目に新聞社視察やdrupa視察を行い、夕食時には疲れ果てていたのが思い出されます。

初日は、フランクフルトにある発行部数36万部を誇るドイツ第2位の「フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング社」の本社視察です。そこでヨーロッパ最初のビックリを体験。何と一般記者1人～3人程度毎に個室が提供されていたことです。日本の新聞社との職場環境の違いに大変驚きました。

また、本社説明時に配られた本紙が、経済、金融やスポーツなどジャンル毎にセクション折りされており、束にするとセクション毎に紙端が揃っておらず、段々になっていて本日2度目のビックリです。「日本ではこんなギザギザはあり得ない。ドイツの人は結構大雑把なんだな～」と一人で納得し、本社から次の印刷工場に移動です。そこには日本では馴染みのないインサーターという装置で、セクション毎に印刷済みの紙面を挿入し、一冊の新聞製品を完成させていました。

後日のdrupa見学で判ったのですが、インサーターの構造上「紙端が揃っているとインサートできない」ことが判明し、紙端がギザギザになっていた理由がここにありました。

* * *

drupaでは2日間に渡り、下流工程を中心に一日中会場を歩きまわり、比較的若手？の私も足が棒です。全体的にはやはりデジタル印刷機がメインを占めていた印象です。事務局の木村様、副団長の矢森様、林様の通訳な

しには、決して成り立たない視察でした。ありがとうございました。

都合により、私は皆さんより2日早く帰国しましたが、とても街並みや自然が綺麗なドイツを後にし、列車でパリに移動。フィガロ紙本社見学後に、一人寂しくバスを下車し、空港へ移動する際にツアー最後のビックリです。JTB様より空港の地図を受け取り、何と一人でタクシーに乗り空港に行くことになったからです。空港まで送り届けてもらえると勝手に思っていた私は目が点です。私の流暢な(?)英語もドライバーにあまり通じず焦りましたが、結局はもらった地図を見せ、その場をしのぎ、無事空港に到着できました。

心残りは、パリは通過しただけで、エッフェル塔、凱旋門など超有名観光地を見ることもなく「花の都パリ」を後にしたことです。老後の楽しみに取っておくことにします。

最後に本ツアーで一緒させていただいた「オランド会」の皆様には親切にいただき、大変お世話になりました。今後もより一層のお付き合いをよろしくお願い申し上げます。

楽しきかな、有意義なる CONPT TOUR

富士フィルムグラフィックシステムズ(株)
執行役員新聞事業部事業部長

辻 裕史

今回のCONPT TOURでは団長という大役を指名され、最初は、大丈夫かなという不安で一杯でしたが、事前説明会の後の懇親会で、その不安はすっかり払拭されました。というのも、今回の参加者は皆様、ツアーに行く前から、「日本～ドイツ～フランス」の下調べに余念のないメンバーばかりだったからです。なんと、「日本酒～ビール～ワイン」の減り方の早いこと早いこと。これにより、最初はお互い緊張しあっていたメンバーもすっかり打ち解けて、大変有意義なツアーに向けてスタートしたわけです。

前段が長くなりましたが、出発当日朝の集合も順調にいき、ツアーは快調にスタートしました。

しかし、最初の都市フランクフルト近郊では日中30℃程度あり、デュッセルドルフでは20℃そこそこになったかと思えば、パリでは15℃程度。しかもパリでは、電に見舞われるほど。各地の温度差に、いささかびっくり。

食事については、個人的には、歳とともに、益々自分は日本人だなーとしみじみ感じます。ドイツでいくらホワイトアスパラがおいしくても、又、パリでいくらエスカルゴがおいしくても、そして各地のビール、白ワイン、赤ワインがおいしくても、やはり日本でいただくお浸しと煮物と日本酒、これに勝るものはないと、改めて感じ入った次第です。

* * *

今回のツアーで、印象に残った点として、中国人の元気。日本でも多くの中国人が訪れてきていますが、同様にドイツ、フランスでも多く見かけました。大きな声で話しながら、たくさんの買い物をしている姿は、何年か前の日本人の姿なののでしょうか？今思うと恥ずかしかったですね。それと、ドイツ、パリの現況。ユーロ圏の危機なんて言われる前からなのかもしれませんが、治安面で比較するとなんと日本は恵まれているのか、このことも、今回改めて感じさせられました。今回、小生も含め、他にもスリ未遂に遭ったメンバーがいました。しかし大事にならず、本当に良かったと思っています。

さて、今回のCONPT TOURの大きな目的は、勿論DRUPAであり、新聞社及び印刷センター視察です。この件については、他のメンバーの方からも報告あるでしょうし、又、報告会もあったので、ここでは割愛させていただきました。

いずれにしても、メンバー全員が「無事に、楽しく、そして有意義に」ツアーを終了することができたことは、事務局の徳永マネージ

ャー始め、参加された皆様方のお陰様であり、ただただ感謝申し上げる次第です。これからも、おつきあいの程よろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

絆

富士フイルムグラフィックシステムズ(株)
新聞営業部販売一課主任

千葉 実

幸運にも印刷の世界4大展示会(ドイツ DRUPA、イギリス IPEX、シカゴ PRINT、日本 IGAS)を今回で制覇させて頂きました。中でも最大の展示会と言われるDRUPAは、桁違いの規模と内容に驚き、歩き疲れながらも、本当に楽しませて頂きました。4年前はインクジェットの走りと言われて、今回は実用可能レベルの発展した技術発表、次回4年後はきっとさらに発展した技術が見られることを非常に楽しみにしております。

* * *

さて今回は、(普段なかなか使う場がないので)天候に恵まれ、メンバー様に恵まれ、最高のツアーでした。また、全員がほぼ無事故、無違反で帰国できたことが一番でした。帰国後、担当のお客様皆様からは面白いハプニング話を期待されましたが、そういう意味では良いお土産がなく、申し訳なく感じております。

思い返せば、出発20日前の事前説明会から私のツアーは始まっていました。自己紹介



居酒屋「千葉ちゃん」。

時、最後には皆様から‘千葉ちゃん’と呼ばれたいと言ったその晩から、ありがたくもそれは実現しました。そして居酒屋 千葉ちゃんもその日から開業しました。皆様のご来店、ご協力の下、お店も大繁盛、様々なお酒、おつまみと共に楽しい時間を過ごすことができました。弊社伝統のおつまみトランクも全て消化することができ、帰国時は非常に身軽に帰宅することができましたのも皆様のおかげです。帰国後、多数の労いのお言葉と感謝のお言葉をありがたく頂戴しました。しかし、正直申しますと、皆様と関わりを持つことが出来たことでの満足感を逆に心より感謝しております。本当にありがとうございました。

* * *

最後に、社内の先輩方より、このツアーでの繋がり(絆)は一生ものだと聞いております。その気持ちが今でも若干分かり、さらに今後継続して行ければなど誠に勝手ながら考えております。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

オランダ大統領就任日を味わう

富士薬品工業(株) 営業三部部長

新井 信夫

世界最大級の印刷展示会「drupa2012」を視察し、あの大きな会場スペースに驚きを感じました。実際、会場内のブースを駆け足で回り、足は疲れ、頭も疲れパニック状態になりました。しかし、印刷技術もアナログからデジタルに進んでいることは、皆が感じ取っていることでしょう。今後も印刷技術はもっともっと進化していくことと思いますが、活字自体は残ってほしいと感じました。

話は変わりますが、約11時間30分のフライトを経て無事フランクフルトに到着しバスからの風景を見ますと緑が多く広がり、住宅は茶系の屋根に白の外壁で統一され、町全体が絵になりとても癒されました。

新聞社(FSD社・フィガロ社)訪問では、日本と同じで環境問題(CO₂削減)を第一に考え印刷に取り組んでいました。又、webにも力を入れ若者の紙面離れをwebで補おうとの努力が感じられました。

WAN IFRA本社訪問では、セミナーを開催して頂きIFRAの取り組みがわかり勉強になりました。ここでも、環境問題への活動に力をいれており、CO₂削減でコスト削減で会社の利益が上がるということです。

最後になりますが、ドイツ・フランスと歴史を肌を感じ、ビール・ワインは五臓六腑で感じとても有意義なひと時でした。

* * *

今回のCONPTツアーに参加でき皆様と9日間の時間を共有することができました事、深く感謝申し上げます。又、フランス新大統領就任式にフランスにいたことで、オランダ大統領と同じ空気を味わったと思うと感激いたしました。

これからも、「オランダ会」の皆様とは長い付き合いとなると思いますが、ご指導・ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

多彩なツアーを満喫！

三菱重工印刷紙工機械(株) 営業本部東京支社
新聞輪転機営業部長

矢森 仁

この厳しい時代に、人も羨む代表的な欧州の都市、ドイツ、フランスの旅！しかも自らが懇話会の企画委員として立案の一翼を担い進めてきた懇話会の最大イベントの一つである欧州新聞事情調査。加えて世界印刷市場のオリンピックと言われるdrupa2012の視察調査も織り込んだ豪華版だ。

元々社の若手の参加を予定していたが、事情により自らのチャンスになってしまった。(若手君御免なさい)。

CONPTツアーは2004年に初めて参加し、

今回は2度目。自らが行く事でますます真剣度が増し、あれもしなければ、これもしたい、と自然と力が入ってしまった。苦手なゴルフでも力が入り過ぎるとろくな結果は生まれない、とは頭で判っているながらも、日本では世界のdrupaの流れの後でJANPSも控えており、世界の印刷市場のトレンド調査に期待は膨らんだ。とは言え、CONPTツアーの良さは、単なる研修視察旅行のみならず、欧州の文化や食が充分に楽しめること。おまけに酒飲みの人間としてはドイツビールやフランスワインの制覇にも意欲が燃える。自分自身で自ら確かめたかったのが、世界の「新聞事業」そして「新聞印刷」の行方だった。欧米で苦境に立たされつつ有る新聞業界と汎用性を広げてあらゆる印刷部門に乗り込んでくるデジタル印刷。命題は、媒体としての「紙かデジタルか」と印刷形態としての「オフセット輪転機印刷かデジタル印刷か」であろう、と考えていた。

結果は予想通り双方のビジネスは未だ完全融合は難しく、中間的なニッチ市場(ますます拡大の可能性は有るが)での付加価値的運用となりそうだ。さて、仕事の話はこの位にして、今回のツアーでは色々な事を試みた。

* * *

基本的にはオプションは総て参加し、娯楽芸術を楽しんだ。ベルサイユ宮殿、ルーブル博物館、世界的に有名なキャバレーLIDOの見学だ。早朝ランニングを欠かせない者としては、偶然趣味を同じくする東日のトライアスロン走者である影山氏と日経のランナーである田村氏で「早朝走ろう会」を結成。フランスでベルサイユ宮殿内の庭園を含むサイクリングコースを試走したが、残念ながら同夜が「さよならパーティ」で2時まで飲んでしまい、1回限りの会合となってしまった。

2004年にも実行したホテル内でのホームパーティーも2度程実施した。FFGSの千葉氏(通称チバチャン)が、上司で団長の辻氏の社命

で大きなカバンに酒、つまみを持参した。「軽くしてあげねば可哀想」と称して結局千葉宅で大宴会。居酒屋「千葉」は非常に部屋を荒らされる結果となった。ルーブル美術館では本物の「ミロのビーナス」や「モナリザ」を鑑賞した。改めてフランスの文化と歴史の深さに感動した。キャバレーLIDOでは、何と舞台一番前の特等席を確保して貰った。ハイヒールで蹴飛ばされそうになりながらも、全員の目線は、ある一点に集中。舞台が始まると、酒を飲むのも忘れて口を開けて見とれた。この様に「硬・軟」多彩な行事がふんだんに盛り込まれたツアーであった。



早朝走ろう会 —東日印刷・影山氏と日経・田村氏

* * *

ツアーが終わり振り返って感心したのは、今回の参加者の統制が非常に取れていた事。大きな遅れも無く、事故も無く、全員が一致協力してツアーの進行に協力して戴いた。新聞社から半数、協力メーカーから半数の参加者で構成された今回のツアーは、双方の気遣いと協力でスムーズに展開した。フランスでは奇しくも大統領交代の日に訪問となるチャンスにも恵まれ、会の名称は新大統領の名に因んで「オランド会」と命名された。

今後共々永いメンバーとのお付き合いを祈念して、締め括ります。

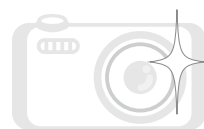


ドイツの新聞スタンド
(第一工業・中島 悠希氏)



drupa会場にて

写真に見るツアー一点描



最も歴史のあるパリの新聞社Le Figaro
(FFGS・辻 裕史氏)



IFRAガーデンパーティー
(FFGS・千葉 実氏)



新聞博物館(アーヘン)
(インテック・林 克美氏)

新局長に就任して

常に最小失点を考える

京都新聞社 印刷局長

山口 雄二



地域活動に関わって10年以上になる。事の発端は天下の宝刀「抽選」による役員選出だった。日曜・祝日の勤務や夜勤もある新聞社特有の労働条件を盾に地域活動には消極的であったのは言うまでもなく、家内に任せばなしで、自分の地域を実感したことすらなかった。そんな男が変れば変わるものである。今や「自分の地域は自分達の手作りで」を合言葉に、地域住民を鼓舞している。何とも不思議な光景である。

地域活動は情報の宝庫である。地域特有の小さな出来事から、政局の話、もちろん新聞についても話題に上ることもある。記事の内容やレイアウト、文字の大きさ、欄外に印刷されている印刷情報にいたるまで、話は尽きない。地元紙を標榜する小紙にとって見逃せない批評も多く、地域に根ざす必要性を痛感させられることもある。良くも悪くも新聞が話題となるありがたさを実感している。

5月1日付けで印刷局長に就任した。入社以来、所属が製作局、印刷局と変わったが、業務の主力をなす巨大マシンの輪転機を操作したことがない。何とも頼りない人間が印刷局の舵を取るようになった。局員には迷惑を掛けることもあるかも知れないが、信頼関係を基軸に頑張るつもりだ。

印刷部門は野球に例えるなら、ホームランやファインプレーを期待されている部門ではなく、ポジションを問わず堅実な守備で貢献する、いわばユーティリティープレイヤーが

求められているのではない。少々のエラーは日ごろの技術研鑽やチームワークでカバーができるが、失点(大幅な刷了遅れ)に繋がるようなタイムリーエラーは決して許されない。日々、堅実な守備(安定稼働)をモットーにしている以上、守備が乱れれば、社内外を問わず手厳しく責任を追及されることもある。プロである以上仕方のないことだが…。超高速で印刷している以上、機械や電氣的トラブルの発生頻度が増し、あってはならないことだが、ヒューマンエラーもつきまとう。やはりここは割り切って、エラーは起こりうることと解釈して、次善の策を準備しておく必要がある。これがトラブル対策だ。試合展開(トラブルの状況)を読み、最短の復旧方法を選択し、チームが一丸となって最小失点で凌ぐことを考えるべきであると心得ている。

印刷局の守備範囲に輸送部門がある。輪転機が順調に稼働しておれば、あらかじめ設定してある輸送コースをたどれば、ほぼ定刻に店着するシナリオとなっている。地震・台風・雪害といった災害時にこそ社運を賭けた対応が求められる部門である。日ごろからの輸送ルートの確認や有事を想定した輸送マニュアルの策定は必需品で、いかに備えているかが重要と考える。従って平時には決して目立つ存在になってならない部門と思っている。

昨年発生した東日本大震災では、日ごろ何気なく暮らせているありがたさを実感させられた。用紙、インキ、発送フィルム等々が供給不足に至り、注文すれば納入されてくる日々のシステムを改めてありがたく感じた。当たり前のことを当たり前にする難しさや、平穩を保つには相当な努力が前提となっていることも改めて感じた。

良質な紙面をいつもの時間に刷り上げ、そして、いつもの時間に必ず読者宅に届ける、そんな当たり前のことに拘り、読者の皆さんに評価していただこうと考えている。

システムに『浸る』

下野新聞社 制作技術局長

坂本 裕一

前号・神戸新聞社の水内情報技術局長の指摘には、いたく共感した次第である。編集から初めて制作技術局へ異動となり、カタカナ、横文字に閉口する日々のなかで、「なにゆえ『ベンダー』なのか。メーカーじゃだめなのか」と思っていた。抜けない根っこのように引っ掛かっていたが、日々世話になっている「今さら聞けない…用語」には語句の説明はあっても、なぜメーカーではダメか、という説明はない。いまだ腑に落ちないままだ。



さて、下野新聞社の制作技術局は、システム技術部と制作部、グラフィックス部で構成されている。新聞製作から災害時支援までシステム全般を司るシステム技術、特殊組版や画像加工、受託印刷などを請け負う制作、カットやグラフ、地図、レイアウトなどデザインを主務とするグラフィックス部。印刷センターは別会社として独立し、デジタル関連も社内の別組織にあるため、主な業務は前記のようなものとなる。このうち、遠からぬ時期に新聞製作システムの更新期を控えて、まず頭をひねらざるをえないのがシステムだ。

わが社も、HPのサーバーのクラウド化の検討を始めた。更新期を迎えるホームページだが、サーバーを外出しすることでリスク減を図る。東日本大震災では栃木県も一部が震度6強の強震に見舞われ、印刷センターも被災したが、本社のサーバーは幸い固定具に守られ、新聞製作を滞らせるほどの被害は出なかった。しかし、バックアップ機器は同じ社内では本機のすぐ隣にある。固定具もモノを言わない規模の大被害に襲われたら、と思うと

身の毛がよだつ。クラウド化の誕生は、ある意味必然ともいえるものだろう。

5月、日本新聞協会技術委員会の日の午前、東京ビッグサイトで開かれていた「2012 JAPAN IT WEEK 春」を覗いてみた。ゆりかもめを「国際展示場正門前」で降りると、会場に続くデッキはスーツ姿の人波であふれていた。入口から長蛇の列。会場内は果てることなくブースの区画が続き、レースクイーンのごとき女性が引きも切らずパンフレットを手渡してくる。

「東京ドーム6倍」をうたった場内は、ブースがひしめき合い、マップを手に尋ね歩かないと行きつけない。お目当ての「クラウドコンピューティングEXPO」のほかに、モバイル、データストレージ、ソフトウェア開発環境展…と区画のコーナーも多数。その間を人波がうごめいていた。そこに展開する千を超す企業ブースはほとんどカタカナ、横文字である。思うに、あれだけの数の展示が必要なものだろうか。とても見切れやしない。

「通路東◆の▼番目の角」。マップであたりをつけ、くだんの企業ブースにどうにかたどり着いたが、それがやっとだった。「これぞ」という展示はほかに見当たらない。四つほどブースをのぞいて、日比谷のプレスセンターに向かうべく、正午には会場を辞した。

決定的な出会いはなかったが、今までにない質感の世界を感じて、新鮮だった。芝生に馴れたサッカー選手が、アイスホッケーの氷上に立った気分、といったところか。

これも新しい仕事である。生来のアナログ人間でありながら、いやそうであるからこそ、異質な世界がゆえに、それに接し、身を浸らせねばならない。すぐに溶け込めるものではないだろうが、まずは馴れるより馴れる、だ。

錆びついた頭に風を通すように、システムという新たな世界に触れていきたい。その感覚をどう新聞製作に生かしていくか、挑戦のしがいがある。最終形は、カタカナ、横文字

を自分なりのアナログ言葉で伝えられるようになることだろうが、いつの日になることか。

異文化理解の第一歩

日本経済新聞大阪本社 製作本部長

佐々木 利晃

「三十年の長きにわたり編集局にお世話になりました。このたび無事職をまっとうできましたのも、ひとえに皆様方の……」。

いや、退職ではなかった。新しい職場に移ったのである。とはいえ、気分は第二の人生である。転職である。今年4月に製作本部に来てからは、これまでの生活が一変した。使われる用語が違う、発想方法が違う、文化が違うのである。

どこの会社でも社風というものがある。日本の新聞社は一般に長い歴史を持つので、これはかなり際立っている。加えてそれぞれの局の歴史もこれまた古い。「局が違えば国が違う」とはよく言ったものである。

私の育った編集部門から見れば異文化との遭遇でもあった。

製作部門は営業戦のようでもある。懇親会やゴルフなど取引先との付き合いがけっこうある。出張も多い。編集局時代は整理部門が長かったこともあって外部との付き合いはあまりなかった。下戸で運動音痴の私は「酒かゴルフか」という究極の選択に迫られ生まれて初めてクラブを握ることになるのだが、話せば長くなるのでここでは省略する。お酒のほうは、訓練と言っても限界があるのでウーロン茶でお付き合いをさせていただくことにした。

製作は経理部門のようでもある。経費がらみの伝票類の多さに圧倒される。折からの不景気でどこの部門でも経費削減が求められて



いる。これまではせいぜい出張費や備品類の伝票しか見たことがなく「こうすれば何万円、何千円減らせる」ぐらいしか考えていなかったが、ここでは扱う伝票類の金額が編集局とは二ケタも三ケタも違うのである。

製作は技術者の集団である。高品質の新聞を生み出そうと日夜奮闘している。そこに「経費を抑えつつ」というのが加わる。この辺りは編集部門に似ていなくもない。ただ技術者同士、他紙とも異様に仲が良い。交流も活発である。この「秘密」にはおいおい迫りたいと思っているが、私が見るにはどうも技術者の共通言語があるようだ。背景には、編集のスキルと違ってテクノロジーは記述化しやすいということがあるのだろう。ともあれ新聞業界全体の技術レベルの底上げにつながっていることは確かだ。「新聞技術」という会報もある。

製作部門はサービス業のようでもある。編集局をはじめ広告、販売各部門の無理な(失礼!)要求にもこたえなければならない。「顧客満足度ナンバーワン」を目指すのだが、かなわぬ場合は……、自然と頭を下げる回数が増えるのである。

最後に、製作部門はもうからない。ここは編集局と同じであり、基本的に直接収益を上げる部門ではない。ただ前述のように毎日巨額の伝票類に接していると、ここはなんとかせねばと思う。コスト意識はけっこう身に着くのだ。

弊社でも電子版が誕生して2年経った。ここでも今まさに局の新しい文化が生まれつつあるのだろう。

とりとめもなく感想めいたものを書いてしまったが、今求められるのは部分最適ではなく全体最適。それぞれの文化を生かしつつ、私としては良き異文化理解者、良き翻訳者でありたいと思う。

楽事万歳

「リフレッシュ」

日本ボールドウィン(株)
第二事業本部マネージャー

長谷川 淳司

昨今では銭湯の廃業が増えているようですが、私の近所ではスーパー銭湯が隆盛を誇っているようです。家族そろって1000円ちょっとで、軽いリフレッシュ気分。風呂上りに小腹が空けば「ちょっと夕飯でも食べていこうか」なんて会話が我が家ではごく頻繁に取り交わされています。

すっかり我が家の休日レジャーの一部と化したこのスーパー銭湯なる存在。古くは1980年代後半の健康ランド全盛期、より低料金で回転率が良く、付帯設備が少なく、設置費用がかからない施設として建設されていたものがこのスーパー銭湯の走りだそうです。

従来は水道水や井戸水を沸かしていた銭湯が、天然温泉をボーリングによって掘り当て、そこに新たな温浴施設をつくったものや、温泉を掘って温泉付きとなったスーパー銭湯が増えています。また温泉が掘り当てられなくても、近場の温泉からトラックでお湯を運んできて沸かしている施設もあります。

館内に関しては、内湯に加えてジャグジー・サウナ・露天風呂等の設備、理髪店やボディケア店が入り、ファミレスをも凌駕するお食事スペースと現在も進化を続けているようです。

雑誌やテレビで目にする秘湯マニアの方々とは一線を画すものの、たまの休日をそれなり時間とそれなりの予算で楽しむ我が家を選ぶスーパー銭湯を幾つか紹介します。

「港北天然温泉スパガーデンジュー」

温泉は源泉かけ流しの内湯が一箇所と、循

環式の露天一箇所。他はミルキーバス、マッサージ風呂、水風呂。乾湿サウナとミストサウナが付いています。泉質はナトリウム-塩化物泉で内湯はヌルヌル感があり、色も茶褐色のコーヒー色で、見るからに効きそうな色です。エステや食事処が充実している点も高評価。またこの最大の(?)特徴として館内着で寝ころべるTV付きリラックスメームにコミックが常時1万冊あります。温泉入ってマンガ読み放題、私にとっては家以上に快適な空間と言っても過言ではありません。

「すすき野 湯けむりの里」

比較的小気軽に、短時間で利用できるスーパー銭湯。子連れの我が家にとっては、こちらの方が気兼ねなく過ごせるので重宝しています。温泉は人工温泉と炭酸泉の2種類、屋上では開放的な露天風呂を満喫できます。この売りは何と言っても岩盤浴。男女共に時間・回数の制限なく水分補給と休息を挟みながら自由に出入りできます。ドライサウナと違い、ジンワリと汗が気持ちよく出て行くのを実感することができます。体内に蓄積された老廃物と、年々増えていくお腹周りの脂肪を排出するべく何度も足を運んでしまいます。

「溝口温泉 喜楽里」

中学生以上利用可の大人の施設。小さな子供は連れて行けないので一人で立ち寄るならここがお勧め。日本では貴重な掛け流しの炭酸温泉、手ですくうとシュワシュワと小気味よい音を立てます。欧州では心臓の湯と呼ばれているそうですね。若干高め温度設定(42°～43°)がツウをうならせる、ツウでなくとも熱さで「ウウッ」と言ってしまうます。

家のお風呂も好きですが、ちょっと足を運んで近所のスーパー銭湯に行くのも気分転換になります。ひと時の休日を湯船で…大げさかもしれませんが、お風呂や温泉を楽しむ文化がある日本に生まれて良かったと思います。

Challenging Technology

私ども金陽社は、昭和5年(1930年)に設立されました。

ニカワロールが一般的に使われていた時代、私ども金陽社は国産初の高速輪転用ゴムロールを発明することで、その第一歩を踏み出しました。

昭和8年(1933年)には新聞輪転用・一般印刷用ゴムブランケットを完成させ、創業82年を迎えた今日では、ゴムロール・ゴムブランケットをはじめとする幅広い製品を多くのお客様からご愛顧頂けるようになりました。

現在、ゴムブランケットでは高速新聞輪転機での品質安定性を重視した「NP90」、「NP91」が多くのお客様からご好評を頂いております。

またメタルバックブランケット「エアージェルメタル」は国内、海外の各新聞社にて採用が進められております。

各種ポジションで高性能化が要求されるゴムロールも常に新しい製品の開発と、安定した供給体制の構築を心がけております。低発熱ロール「エコマスター」は、熱によって引き起こされるムシレやインキ変化などのトラブルを大幅に抑制すると共に、転がり抵抗を小さくすることで省エネを実現しました。

またアフターサービスにも力を入れており、お客様の立場に立った迅速な対応を心がけております。

これからも、新聞業界の発展に向けて更なる新製品の開発と提案、そしてサービスの提供に向け鋭意努力をして参ります。

今後ともご愛顧を賜りますよう、お願い申し上げます。

今後ともご愛顧を賜りますよう、お願い申し上げます。

kingyo

(株)金陽社

東洋インキグループ 感謝のつどい

2012年4月11日(水)東京・日比谷の帝国ホテルにて、同23日(月)には大阪市内の帝国ホテル大阪にて、『東洋インキSCホールディングス発足1周年感謝のつどい』を開催いたしました(「SC」はSpecialty Chemicalの頭文字です)。

私たち東洋インキグループは、昨年4月、新たなガバナンス体制としてホールディング制に移行しました。東洋インキSCホールディングスがグループ連峰経営の中心となり、東洋インキ株式会社、トーヨーケム株式会社の2つの中核事業会社を設立しました。さらにこの4月には、第3の中核事業会社であるトーヨーカラー株式会社がスタートし、3つの事業会社がグループ全体の事業を牽引していく体制が整いました。

東洋インキグループは、この新体制移行を『第二の創業』と位置づけ、目指す姿『世界に役立つスペシャリティケミカルメーカーへの進化』へ歩みを新たにしております。

今回の感謝のつどいは、これまで東洋インキグループを支えてくださったお客様やお取引先様に感謝するとともに、新ガバナンス体制のもと『会社の歴史に甘えることなく、グループ社員の一人ひとりが起業家スピリットをもって、お客様にとって最も近いパートナーとなれるよう進化していく』というメッセージを込めて開催したものです。

2日間で約1,850名のお客様にご来場いただき、私たちが普段から多くの方々にご支援いただいていることを改めて実感し、また、今後ともご期待に添えるよう進化していかなければならないということを再認識した日となりました。

TOYOINK 東洋インキ(株)

「DynamicCMS」で課題を解決

「DynamicCMS」は、昨年7月にVer1.0を正式リリースさせて頂くことができました。JANPS'09にて国内初の本格的な新聞社向けコンテンツマネジメントシステムとしてご紹介させて頂いてから、早くも3年が経過しようとしています。当時は、「CMSと素材管理となにが違うのか?」という点が議論の中心でありましたが、ここに来てお客様からは、DynamicCMSがこれまでの素材管理システムとは根本的に違う考えで設計されたシステムであることをご理解頂けたと共に今後の新聞社の基幹システムにおいて必須となる「多メディア展開」を十分に考慮できているシステムであるという評価を頂戴できるようになりました。

改めて「DynamicCMS」の製品概念をご説明をします。素材管理S、組版S、メディアSなどのこれまで独立していたシステムにおいて共通で利用される機能を「核=コア」として整備しました。これまでの素材管理を“拡張”するという発想ではなく、当初から多メディア展開を熟慮した上でコンテンツ管理、画面制御などを再設計しております。さらには、多メディア展開に伴い、複雑化する業務内容とそれに伴うワークフローや権限管理をアプリケーションに影響を与えることなく柔軟に対応できる仕組みとなっています。「JANPS 2012」には、最新バージョンを実機展示する予定でございますのでご来場の際は是非お立ち寄り頂ければと存じます。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

東芝ソリューション株式会社 TOSHIBA SOLUTIONS CORPORATION

「想いをカタチに ～創造ナビゲート～」

当社は1937年に創立し、本年創立75年を迎えました。

新聞各社には長年に渡りご愛顧を頂き厚くお礼申し上げます。

その間、当社は常にお客様目線に立ち新聞印刷現場であがったご要望を具体化して数多くの製品を開発してまいりました。

近年においてはめまぐるしく変わる経済情勢、常に求められる環境問題への配慮といった大きなテーマに対応することは新聞製作においても必須事項と考えられます。

そのような環境下で当社が開発した製品の一つが『SSBC-T10』（オフセット輪転機用ブランケットクリーナー）です。4×1輪転機用に開発し上下2胴を1台の洗浄ユニットで同

時に洗浄し「イニシャルコストの低減」を実現し、また1本の洗浄布の表裏両面でそれぞれ1胴ずつを洗浄し「ランニングコストの大幅削減」を実現しました。同時に装置数量が従来機の半数になるので洗浄装置として生じる環境負荷についても低減されております。『SSBC-T10』は既に複数社より御注文を頂いており、本年11月開催の「JANPS2012」にも実機展示する予定でございますのでご来場の際は是非お立ち寄り頂ければと存じます。

当社は「想いをカタチに～創造ナビゲート～」をものづくりのテーマに掲げております。お客様を含め携わる方々の想いをカタチ（製品化）にし、新たな試みのベストパートナーになれるようチャレンジしてまいります。

今後ともよろしくお願い申し上げます。



新入会のことば

椿本興業株式会社

執行役員 装置担当 藤重 卓一

この度、日本新聞製作技術懇話会に入会させて頂き、大変光栄に存じます。弊社は昨年創業95周年を迎えましたが、長年機械と技術の総合商社として培った技術力を生かし、最適商品のマネジメントにより、様々な業界の広範な用途に対して、素材、部品からユニット、装置、システムに至るまで、産業界の顧客に新たな価値を提供し続けております。

新聞・印刷の分野においては、姉妹会社の椿本チエインと共に全国の新聞社並びに印刷会社に巻取紙の受け入れ、紙庫、給紙、発送工程等に、最先端の技術を追求しながら沢山の設備を納入させて頂きました。

携帯端末の高度化、普及を背景に、業界はドラスチックな環境の変化を受けておりますが、情報メディアの中心軸である新聞業界の発展、その大事なパートナーシップ連携の機軸である本会の隆盛のため、微力ではございますが、ご協力させて頂く所存です。

ご指導、ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

JANPS準備部会報告

クラブ委員長(JANPS準備部会副部会長)

村松 哲

「JANPS準備部会報告」3回目は、クラブ委員会からご報告します。

クラブ委員会では、JANPS期間中に、「CONPTセミナー」と「CONPT-TOUR再会パーティー」の2つの行事を企画しています。TOUR再会パーティーの方は、今回も前回と同様の形での開催準備を進めていますが、CONPTセミナーについては、今回大幅に見直すことにしました。

前回まで、CONPTセミナーは別会場で開

催していましたが、今回、会期が4日→3日に短縮されたこともあり、見学者が分散する恐れのある、会期中の別会場での開催は行わないこととし、会場内に設けるセミナーブースでの開催を計画しています。

セミナーブースは80~100席程度の座席と、簡単なステージ・演台、プロジェクター、音響機器を備えたセミオープンスペース(満席の場合は立ち見も可とする)を前提に、会場レイアウトを所管するJANPS準備部会と調整しています。

CONPTセミナーは、会期中の毎日午後(14時頃を予定)の1時間、日ごとに異なる3つのテーマで開催する予定です。現在、テーマを選定中ですが、従来より小規模の会場となるため、より専門的なテーマを設定する予定です。現在、10月に開催されるIFRA展(今回からWorld Publishing Expo)の視察報告などが候補に上がっています。

また、Webサイトからの聴講申込や、資料のWeb掲載(必要な人は事前にダウンロード、印刷して持参してもらうことで、資料準備の手間を省き、資料代も不要にする)など、時代に即した新しい運用形態も検討しています。

CONPTセミナー開催時間以外のセミナーブースについては、JANPS準備部会が企画している「海外来場者向けガイダンス」などにも使用しますが、空き時間について、出展各社のセミナー等に利用いただくことも考えています。追って、全体の計画がまとまり次第、利用希望を募るご案内を予定しています。

クラブ委員会では、以上の計画を推進する実行部隊として、JANPS準備部会に倣って、検討分科会を発足させました。メンバーは、平井クラブ副委員長、菅原クラブ委員、斉藤クラブ委員と私(村松)の4名です。CONPTセミナーのテーマや、セミナーブースの活用方法など、ぜひ多くのご意見をお寄せください。

第38回定時総会開く

第38回となる定時総会を、5月30日(水)午後4時から日本プレスセンター会議室で開催した。会員社29社の35名が出席し、1時間余りにわたり報告・議案を審議した。来賓には新聞協会技術委員会副委員長の仲沢仁氏(日経)、同編集制作部長の佐塚正樹氏、同主管の仙石伸也氏を迎えた。

芝則之会長は開会挨拶で、11月開催のJANPSは出展300小間を超え想定収入予算を達成できる見通しとなっており、JANPS成功を新聞界の難局を乗り切る起爆剤としたいと出席者に協力を求めた。また5月のdrupaツアーに続き年2回となる10月のIFRA展ツアーについても、立案するので積極的な参加をお願いすると述べた。仲沢副委員長からは、米国の63地方紙を一举に買収した著名投資家バフェット氏の事例が挙げられ、新しいビジネスモデルも見えてきて新聞はまだまだ可能性を残していると、会場を勇気づける発言があった。

4月に新しく入会した椿本興業(株)の紹介と、一方では(株)イリスが退会し現在の会員社数は42社となっているとの報告があった。

芝会長を議長に選出し、評議員会(藤間修一副会長)、クラブ委員会(村松哲委員長)、企画委員会(林克美副委員長)、広報委員会(辻裕史委員長)がそれぞれ年度活動報告を行った。次いで23年度事業報告、同会計報告(113万9,678円の赤字)、同監査報告を了承し議事に入った。

◇第1号議案＝総額2,446万500円の24年度実行予算案(7月からの月額会費6,500円引き下げを盛り込む)

◇第2号議案＝24年度事業計画案

◇第3号議案＝評議員・正副委員長の新任留任、新会計監事(島光一氏)の人事

◇第4号議案＝各社懇話会担当者交代にもなう3委員会の新体制

以上の4議案を拍手で承認し1時間余りの総会を終えた。なお、25年2月の例会からは、開催順をクラブ委員会、企画委員会、広報委員会と続けて、各種案件を承認する評議員会は最後に開催することになった。

総会後、記者クラブ会議室に移り懇親会を開いた。来賓の方3名と24社29名の方々が1時間半にわたって歓談、藤間副会長の中締めで定時総会の日程を終えた。

(事務局)

会員消息

■新入会(4月1日付、会員総数42社)

*椿本興業(株)

(〒108-8222)港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル30階

TEL: 03-6718-0151

FAX: 03-6718-1860

代表者: 藤重 卓一氏

(執行役員装置担当)

担当者: 平井 耕一氏

(装置営業部システム三課課長)

■担当者変更

* (株)椿本チエイン (4月1日付)

[新]後藤 英次郎氏(セールスエンジニアリング部SE5課新聞担当参事)

[旧]佐々野晴規氏(東部営業部 物流営業2課参事)

* ニッカ(株) (4月1日付)

[新]菅原 清弘氏(オフセット印刷機器本部次長)

[旧]角川 武氏(執行役員オフセット印刷機器本部 本部長)

* 日本電気(株) (4月2日付)

[新]大倉 潤氏(メディアソリューション事業部 第一ソリューショングループソリューションマネージャー)

[旧]宇根沢 聡氏(メディアソリューション事業部第一ソリューショングループ主任)

*クォード・テック日本支店(4月3日付)

[新]三木 幸一氏(営業課長)

[旧]有川 直彦氏(営業課長)

*東和電気工業(株)(4月12日付)

[新]木村 正信氏

(営業技術部営業技術課課長)

[旧]後藤 友吉氏(営業部長)

*日本新聞インキ(株)(4月18日付)

[新]平安 喜久氏(東京営業部長)

[旧]佐々木眞二氏(執行役員営業担当)

*岡本化学工業(株)(5月1日付)

[新]佐藤 照明氏(販売部係長)

[旧]柿沼 秀和氏(第一営業部販売部主任)

お悔やみ

会友の山浦元氏(元PDI)が昨年12月に逝去されました。

謹んでお悔み申し上げます。

CONPT 日誌

3月16日(金)第7回JANPS準備部会
(出席10名)

4月12日(木)評議員会並びに第5回JANPS
運営委員会(出席10名)
新聞社向けJANPS出展説明会
(於新聞協会8階会議室、新聞
社7社13名参加)

4月17日(火)クラブ委員会(出席8名)

4月18日(水)企画委員会(出席14名)

4月24日(火)広報委員会(出席8名)

5月9日(水) CONPT-TOUR2012出発

5月15日(火) JANPSセミナー検討部会
(出席6名)

5月17日(木) CONPT-TOUR2012帰国

5月23日(水)第8回JANPS準備部会
(出席10名)

5月30日(水)第38回定時総会(於日本記者ク
ラブ宴会場並びに大会議室、出
席29社38名、来賓3名)

6月12日(火)評議員会並びに第6回JANPS

運営委員会(出席9名)

14日(木)クラブ委員会(出席6名)

15日(金)～16日(土)

第36回国内研修会～佐賀新聞社
見学～(19名参加)

19日(火)企画委員会(出席12名)

21日(木)広報委員会JANPSパネル検討
部会(出席4名)

広報委員会(出席6名)

7月6日(金)第110回技術懇談会-CONPT-
TOUR2012報告会&懇親会(於
レストラン・アラスカ、94名参加)

新着資料

(国内)

*日本新聞協会“新聞技術” No.218、219 “NSK
経営リポート” No.11～12、“NIEニュース”
第66号、“新聞広告報” 747号

*富士フイルムグラフィックシステムズ
“FGひろば” Vol.150～151

*日本IBM “無限大” No.130

*インテック“季刊インターリンク”第18～19号

*三菱重工“三菱重工グラフ” 166～167

(海外)

*WAN-IFRA “IFRA Magazine” 1～4月号

IFRA 展視察ツアーのご案内

日本新聞製作技術懇話会では、10月29日
(月)～10月31日(水)フランクフルトで開催
されるIFRA展(今回からWorld Publishing
Expo)並びにIFRAセミナー、ドイツの新聞
社視察ツアーを下記の日程で実施いたしま
す。ツアーの募集要項は、7月中にご案内い
たします。多くの方のご参加をお待ちしてお
ります。

◇日 程 10月28日(日)～11月2日(金)

◇募集人員 15名

◇訪問都市 フランクフルト、ミュンヘン

◇募集締切 8月下旬